

九州工業大学の近況（H29.10～）について

九州工業大学学長 尾家 祐二

- (1) 2018 年新年に想う -未来を思うことについて- (H30.1.4) (別紙①)
- (2) 秋、人の意志について想う(H29.10.5) (別紙②)
- (3) 学生が取り組んだ熊本地震復興支援活動について、『KASEI 九州建築学生仮設住宅環境改善プロジェクト実行委員会』にて発表報告 (別紙③)
- ・工学部建設社会工学科建築デザイン研究室(佐久間治教授)
 - ・KASEI 熊本地震復興支援活動として、熊本県上益城郡益城町内の飯野小学校仮設住宅団地の敷地内に、こども達や高齢者の方たちのための並木下の居場所としての「グリーンテラス計画」(東屋と木製デッキテラス)と、みんなの家(集会場)の「縁側の増築計画」を企画・デザイン・設計し、自ら製作・施工・実施
- (4) イクボスセミナーを実施 (別紙④)
- ・H29.12.6 (水) @戸畑キャンパス (対象：課長補佐級以上の事務系管理職)
- (5) 産学連携教育審議会を開催 (別紙⑤)
- ・H29.12.5 (火) @戸畑キャンパス (目的：教育改革等に産業界からの意見を採り入れること)
 - ・【1 部：「産学クロストーク」と題した産業界・学生・大学によるセッション、2 部：共同講座やアントレプレナーシップについてのディスカッション】
- (6) 「超小型衛星技術に関する留学生受入事業」シンポジウムを開催 (別紙⑥)
- ・H29.12.4(月) @戸畑キャンパス 百周年中村記念館
 - ・国連宇宙部の Luc 氏、内閣府宇宙開発戦略推進事務局の行松氏、宇宙航空研究開発機構の若田氏らによる基調講演
- (7) 「人事制度改革マラソン」スタート (別紙⑦)
- ・「安心と誇り」を持って働ける環境を自らの手で作り、大学のよりよい変革に繋げていくため、人事制度改革への取組
 - ・人事制度チーム、CDP チーム、コミュニケーションチーム、マーケティングチームの4つのWSを実施
- (8) マレーシアプトラ大との合同シンポジウム「SAES2017」を開催 (別紙⑧)
- ・H29.11.14 (火) 15 (水) @マレーシアプトラ大学 (両大学において毎年開催。5 回目)
 - ・プレナリーセッション、基調講演、オーラル発表、ポスター発表では、日本・マレーシアのみならず、近隣のタイ、シンガポールからの研究者も参加し、参加人数は 180 名を超える規模



(9) cobaco tobata(コバコ トバタ)がグランドオープン (別紙⑨)

- ・本学工学研究院建設社会工学研究系所属の徳田光弘 准教授
- ・築約 60 年の旧産婦人科医院だったレトロな建物をリノベーションし、ぬくもりのある懐かしい雰囲気各部屋に個性豊かなショップが集まる複合商業施設（現在ちいさな 6 店舗（cobaco）が営業中）

(10) 超小型衛星試験センターが ISO-17025 認定を取得 (別紙⑩)

- ・ISO-17025 とは試験所・校正機関が正確な測定/校正結果を生み出す能力があるかどうかを、権威ある第三者認定機関が認定する規格
- ・ISO-17025 認定には大きく分けて「試験」と「校正」の 2 種類の分野があり、超小型衛星試験センターは「試験」分野の「人工衛星及び人工衛星コンポーネントの ISO-19683 及び JAXA JERG-2-130-HB003 に基づく振動試験」について認定を取得

(11) 工学女子シンポジウムを開催 (別紙⑪)

- ・H29.10.21 (土) @戸畑キャンパス 百周年中村記念館 (H29 年度 文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(特色型)」および国立大学協会「国立大学フェスタ 2017」の関連事業)
- ・女性教員による講演、本学や北九州高専の女子学生による研究発表

(12) 教育フォーラム 2017 を開催 (別紙⑫)

- ・H29.10.13 (金) @戸畑キャンパス 百周年中村記念館
- ・「学修・教育情報を活用した人材育成教育と社会的質保証-産学の対話と共働を目指して -」
- ・文部科学省の松永氏による特別講演、パナソニック株式会社の中尾氏による基調講演、およびパネルディスカッション

(13) 本学のタグライン【未来を思考する「モノづくり」と「ひとづくり」】を策定 (別紙⑬)

- ・タグラインとは、九州工業大学の社会に対する約束を言葉で表現したもので、本学の建学の理念である『技術に堪能なる士君子』の養成を現代の言葉で改めて整理

(14) 本学 OB 【石黒 鎮雄 (いしぐろ しずお) 氏】のご紹介 (別綴り資料)

□ 国際交流一覧【大学間（学長レベル）の組織的交流のみ】

- ・6 番目のベトナムの交流協定校となるホーチミン工科大学 (HCMUT) との交流協定書を締結 (H29.12)
- ・チェンナイ工科大学 (印) の P.Sriram 学長が飯塚キャンパスを訪問し、協定締結へ向け協議 (H29.12)
- ・マラ工科大学(馬)の Hassan Said 学長ら 4 名が本学を訪問し、国際連携の展開について協議 (H29.10)
- ・モンゴル科学技術大学と JICA 工学系高等教育支援プロジェクト(MJEED)に基づく国際共同研究を開始 (H29.10)
- ・モンゴル国立大学(NUM)の Ya TUMURBAATAR 学長と Baldorj OCHIRKHUYAG 副学長が本学を訪問し、モンゴル初の衛星(Mazaalai)の宇宙空間での運用状況の報告など (H29.10)
- ・独立行政法人 国際協力機構(JICA)との包括連携協力協定を締結 (H29.10)
- ・モンゴル国立大学(NUM)より、創立 75 周年記念式典の公式招待を受け、学長ほか 2 名が同式典に出席 (H29.10)
- ・米国にてニューヨーク市立大学シティ校との合同ワークショップを開催 (H29.9)

□ 受賞一覧

【学生】

- ・ICT-ROBOT2017 で、「Best Conference Paper Award」を受賞 (工学府機械知能工学専攻 M2 津上祐典)
- ・IJSEE2017 で、優秀プレゼンテーション賞を受賞 (工学府工学専攻 D2 酒井悠正、同機械知能工学専攻 M2 上田鷹彦)
- ・第 60 回日本顕微鏡学会シンポジウムで「学生優秀演題」に選定 (情報工学府情報創成工学専攻 肥後智也)
- ・第 8 回アジア溶射会議(ATSC2017)で「Most Promising Young Scientist Award」を受賞 (工学府物質工学専攻 M2 神林一輝)
- ・材料系の国際会議 (IUMRS-ICAM2017) で研究奨励賞を受賞 (大学院生命体工学研究科 D3 濱井瞭)
- ・第 18 回先端知能システム国際シンポジウムで Best Paper Award を受賞 (情報工学府学際情報工学専攻 M1 渡邊朝子)
- ・日本金属学会 2017 年秋期講演大会で優秀ポスター賞を受賞 (工学府物質工学専攻 M1 東山将士)
- ・国際会議(ICCAS2017)にて Student Best Paper Award を受賞(工学府機械知能工学専攻 M2 平山一希)
- ・第 16 回情報科学技術フォーラム(FIT2017)で「奨励賞」を受賞 (情報工学府学際情報工学専攻 M2 小宮凜子)
- ・国際会議(ICOLSE2017)で「The Young Scientist Paper Award」を受賞 (工学府電気電子工学専攻 M2 田上剣汰)

【団体・大会】

- ・CEDC2017 で学生プロジェクト「SHO-GI 開発プロジェクト」による「将棋を通したユニバーサルコミュニケーションへの挑戦」が Research work 部門で Bronze Award を受賞
- ・アメフト部が九州学生 2 部リーグで優勝、1 部リーグチームとの入れ替え戦に勝利し、創部以来初の 1 部昇格
- ・国際生体分子デザインコンペティション BIOMOD2017 世界大会で Project Awards: Silver(銀賞)を受賞 (情報工学部学生チーム)
- ・「OECU 杯ヒト型レスキューロボットコンテスト 2017」搭載カメラ部門で優勝 (工学部学生チーム)
- ・第 27 回マイクロマウス九州地区大会で Pi:Co 杯において優勝、クラシック競技総合 3 位 (学生ロボットサークルの KIT-ロボコンから参加した竹下昌志さん(工学部電気電子工学科 2 年))
- ・JIA(日本建築家協会九州支部北福岡地域会)日韓合同学生ワークショップ in ゆふいん「風景とコミュニティのためのしなやかなデザイン」建築デザイン設計競技で最優秀賞を受賞 (工学部建設社会工学科建築デザイン研究室)
- ・BIRDS プロジェクトが実践してきた新興国・途上国出身の留学生を対象とした宇宙工学教育が、「GEDC Airbus Diversity Award 2017」を受賞
- ・第 45 回九州学生陸上競技選手権大会において工学部応用化学科 4 年尾崎さんが男子 110m ハードルにて優勝

【教員・職員】

- ・日本数学会・関数方程式論分科会で「関数方程式論福原賞」を受賞 (工学研究院基礎科学研究系 若狭徹准教授)
- ・情報処理学会の IOTS2017 で「優秀プレゼンテーション賞」を受賞 (情報科学センター 中村豊准教授)
- ・国際会議(The 12th KICSS)で『The Outstanding Paper Award』を受賞 (工学研究院基礎科学研究系 三浦元喜准教授)
- ・日本機械学会流体工学部門「フロンティア表彰」を受賞 (情報工学研究院機械情報工学研究系 瀧脇正樹准教授)
- ・国際会議(The 6th WTC 2017)で Best Poster Award を受賞 (工学研究院機械知能工学研究系 西川宏志准教授)
- ・日本機械学会材料力学部門 2017 年度部門賞「貢献賞」を受賞 (工学研究院機械知能工学研究系 野田尚昭教授)
- ・2017 Oxford Journals - Japanese Society for Bioinformatics (JSBi) Prize を受賞 (情報工学研究院生命情報工学研究系竹本和広准教授)
- ・日本味と匂学会 第 51 回大会で平成 29 年度の研究奨励賞を受賞 (生命体工学研究科人間知能システム工学専攻 大坪義孝准教授)
- ・国際会議(LDIA2017)で『Best Presentation Award of the Oral Session』を受賞 (工学研究院先端機能工学研究系 小森望充教授)

2018年1月4日

2018年新年に想う－未来を思うことについて－

九州工業大学学長 尾家祐二

“未来を思考する「モノづくり」と「ひとづくり」”

新年おめでとうございます。

年の初めは、改めて、自らが何者であり、何を思い、何を行ってきて、今後何を行いたいのか、そして、どうあるべきかについて思いを馳せる良い機会だと思います。

本学の前身である明治専門学校が開学した100年以上前の日本においては、産業振興が重要課題であり、それを担う人材育成は急務でありました。そして、「技術に堪能なる士君子の養成」をモットーに教育研究活動を行ってきました。私たちは、その出発点を意識しつつも、変化し続ける社会との相互作用の中で、自らを捉え直し続け、活動を継続していくことが重要であると考えます。今を生きる私たちは、もちろん今を把握し、今を大切にしなければなりません。それと同時に、育つ人が活躍する未来、創造した知が活かされる未来に思いを馳せ、未来を育てる営みに参加していることを自覚した活動を行いたいと思います。

さて、昨年12月にカズオ・イシグロ氏がノーベル文学賞を受賞されました。長崎県の生まれで、お父様（世界的海洋学者の石黒鎮雄氏）が、本学の前身である明治専門学校（北九州市）で学び、御卒業されたことを知り、受賞をさらに嬉しく思います。その受賞講演および晩さん会の挨拶では、人々が憎しみを増幅させ、激しく敵対する現代において、私たちを隔てる壁を乗り越えるような活動の大切さを訴えています。そして、私たちはさらに多様でなければならないと述べています。

世界が巨大な困難に直面していた第二次世界大戦のときに、アルメニア人であるサローヤンが、サンフランシスコで小説「ヒューマンコメディ」（サローヤン著、小川敏子訳、光文社刊）を執筆しました。主人公のホーマ（14歳）は、学校に通い、電報配達の仕事もしています。戦時中ですので、戦死を知らせる電報も配達しなくてはいけません。そのような中、放課後、彼を残して話す

古代史の担当のヒックス先生の言葉が大変印象的でした。「民主主義の国では、基本的に人はみな平等です。でも、一人ひとりの努力しだいでいろいろなちがいが出てくるわ。私が教えているみんなには、努力をおこたらず胸を張って生きてもらいたいと思っています。それぞれの個性に注文はつけません。お行儀がいいとか悪いとか、まったく問題ではない。そうした表向きのふるまいの奥にある人間性に、私は注目しています。」「人としての温かさがあるかどうか。真実を尊び胸を張って生きる、短所も長所も自分の一部として受け入れる。それが大事なよ。人間としてはそれでじゅうぶん。」「そういう人間性が育っているなら、あとは思いのままにふるまえばいいの。一人ひとりが自分らしくあってほしい。」

そして、そのような大変困難な時代にあって、ヒックス先生は次のように続けます。「気に食わない相手に尊敬の気持ちを抱くのは不可能ではない。それがわかった時、人は人間性にめざめ、教養を備えた人間として磨かれていくのです。」

今、世界（国連サミット）は、持続可能な世界を実現するための国際目標として、17の持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals, SDGs)を掲げています。「貧困を無くそう」が1番目の目標として始まり、4番目は「質の高い教育をみんなに」、7番目は「エネルギーをみんなに、クリーンに」、9番目は「産業と技術革新の基盤をつくろう」、12番目は「つくる責任、つかう責任」、そして17番目は「パートナーシップで目標を達成しよう」です。持続可能な世界を実現するために、高度な技術を身につけた人材が、多様な人たちと連携して貢献することが大事になります。

カズオ・イングロ氏の思い、ヒックス先生の教え、SDGsへの取組み、これらが示す分断するのではなく多様性を認め合うことの大切さ、未来を思考することの意義を多くの人たちが共有することによって、このような考え方、取組みに対する価値はさらに高まります。

本学は、未来を思い、高い社会的価値を備えた教育研究活動を実践し、様々な人たちや組織と、その価値を共有できるようにしたいと考えます。

新たな年、皆様が多くの良い機会に恵まれ、幸せな思いで過ごされますことをお祈りします。

2017年10月5日

秋、人の意志について想う

九州工業大学学長 尾家祐二

大学院博士前期課程及び後期課程の学生を対象として、9月22日には学位記授与式、10月2日には入学式を行いました。学位記授与式では、15の国と地域からの33人の留学生を含む45人が修士または博士の学位を取得し、入学式では16の国と地域からの44人の留学生を含む49人が大学院に入学されました。大変嬉しいことです。

この時期は、多くの留学生が卒業し、入学する時期です。日本も、かつて7世紀から8世紀にかけて、多くの留学生を隋と唐に派遣しました。遣隋使及び遣唐使です。隋や唐と交流し、制度や技術を学びました。大使等と共に僧など多くの留学生も送り、中国からも僧などが来日しています。(東野治之著「遣唐使」岩波新書) 駐日アメリカ合衆国大使を務めたライシャワー氏は、著書「ライシャワーの日本史」において、遣隋使及び遣唐使を取りあげ、「このような使節派遣からただちに政治的な成果が上がることはほとんどないし、経済的意味もたいしてなかった。しかし、文化的重要性にははかり知れないものがあった。」と述べ、「僧侶や学者、美術家をはじめとして様々な分野の専門技術者がこの使節団に加わり・・・日本に帰ると、それぞれの分野で指導的な立場についた。・・・このようにして中国に留学生を送ったという点で、日本の指導者はまことに賢明だったと言わなければならない。これは、いわば世界最初の組織的な海外留学生派遣計画であった。」と述べています。今も、私達は、その恩恵に浴していることが数多くあると思います。

5月に本学の連携大学である揚州大学を訪問しました。上海虹橋駅から鎮江南駅まで中国高速鉄道に1時間ほど乗り、そこから車で1時間ほど移動すると揚州市に着きます。そこに、揚州大学があります。学生数4万人以上という大規模な総合大学です。これまで2007年に国際交流協定を締結後、2009年にはダブルディグリープログラムの協定(両大学に在籍し、両大学の学位を取得することができる教育プログラム)を締結し、毎年3名～5名の学生を本学に受け入れています。大変友好的な関係を築いており、その相互確認と、教育並びに研究に関する連携活動をさらに発展させること等について、焦

新安(JIAO Xinan)学長と話をすることができました。その際に、学長が、本学との連携に強い関心と期待を示されていることを話されるとともに、揚州と日本を繋ぐ鑑真和上の話をされました。鑑真和上は揚州の出身だったのです。ずいぶん以前に読んでいた井上靖著「天平の薨」(新潮文庫)のかすかな記憶を辿っても、その際は、その事までは思い出せませんでした。学長からは、揚州にある鑑真和上ゆかりの大明寺を訪問することも薦められました。

さて、そこで、帰国して、「天平の薨」を再度読み、上記「遣唐使」の本も新たに読みました。そして、先日、久しぶりに、奈良の唐招提寺に行きました。鑑真和上のお墓があり、そこには、日中友好を祈念して、揚州の木である瓊花が植樹されていました。揚州は、遣唐使の経路において、重要な都市であったことを再確認しました。「律令国家として第一歩を踏み出してまだ90年、仏教が伝来して180年、政治も文化も強く大陸の影響を受けていたが、何もかもまだ混とんとして」(「天平の薨」)いた日本においては、まだ仏教の教義を伝えることができる学徳優れた人物がいませんでした。仏教の基準、標準となるようなものが需要であるとの考えでしょうか、733年遣唐使として派遣された僧の使命は、唐からそのような人を招ぶことでした。鑑真がその要請を受け、5回目の渡日の試みが成功して、日本に到着できました。

唐との行き来は、船を用い、難破することも多く、亡くなった人達もたくさんいたとのこと。まさに命がけです。生きて、日本に戻ることができた人達のその後の活躍による成果はもちろん称賛されるべきですが、不幸にも亡くなった人についても、学び伝えたいというその意志は尊く、その人に接した人々等によって、その意志が受け継がれてきたことと思います。私達は、何を成しえたか、だけではなく、何を成そうとしたか、その意志に光を当てることが大切であると考えます。全く異なった文脈ですが、意志については、織田信長を主人公とした辻邦夫著「安土往還記」(新潮文庫)の中の、「私が彼のなかに見るのは、自分の選んだ仕事において、完璧さに達しようとする意志である。私はただこの素晴らしい意志のみ・・・私はあえて人間の価値と呼びたい」という一節も印象的です。

大学は好奇心、探求心そして学びの意志を持った人達が集まる場所です。学びを通して、またそれらの意志が互いに影響し合って、新たな意志が生まれ、育ち、その後の人生に良い影響をもたらすことを願っています。

本学学生が取り組んだ熊本地震復興支援活動について、『KASEI九州建築学生仮設住宅環境改善プロジェクト実行委員会』にて発表報告を行いました



本学の工学部建設社会工学科建築デザイン研究室(佐久間治教授)では、本年度のKASEI熊本地震復興支援活動として、熊本県上益城郡益城町内の飯野小学校仮設住宅団地の敷地内に、こども達や高齢者の方たちのための並木下の居場所としての「グリーンテラス計画」(東屋と木製デッキテラス)と、みんなの家(集会場)の「緑側の増築計画」を企画・デザイン・設計し、自ら製作・施工・実施を行いました。

本プロジェクトの成果について、平成29年11月26日(日)に熊本県立大学で開催された『KASEI九州建築学生仮設住宅環境改善プロジェクト実行委員会』にて発表報告を行いました。

このプロジェクトは昨年度から、数回にわたり、仮設住宅の自治会長さんと打合を重ねながらデザイン計画案を検討してきたもので、実施にあたっては、佐久間教授の指導のもと、研究室の修士1年の今井智也さんを中心に、徳永普さん、野口亮太さんが企画準備し、学部4年の池尻賢也さん、石川龍さん、井薬大希さん、西田淳さん、松山裕さんが製作に参加しました。

研究室一丸となり、連日36℃前後の炎天下での作業を乗り切り、なんとか計画を完成することができました。4日間という短期間で完成には、製作技術指導にボランティアとして参加くださった北九州市内の工務店さんと、福岡の復興支援ボランティアNPOの方々の協力が大きな支援となりました。ご協力いただきました皆さまに、感謝申し上げます。

完成後、仮設住宅の方々から「夏休み前に2つの快適な居場所ができた」ととても喜んでいただくことができ、この2つの新たな居場所が、仮設の方々の今後の生活の中での交流や休息に少しでもお役に立てればと願っています。



東屋と木製デッキテラスの施工の様子



東屋と木製デッキテラスの施工の様子



東屋と木製デッキテラス完成!



みんなの家の緑側増築の様子



炎天下の作業に奮闘する学生たち



緑側が完成!

イクボスセミナーを実施しました

平成29年10月27日(金)に北九州市の「北九州イクボス同盟」に加盟した本学では、12月6日(水)、課長補佐級以上の事務系職員を対象に男女共同参画推進室主催の管理職向け「イクボスセミナー」を実施しました。

「イクボス」とは、部下や職場スタッフのワーク・ライフ・バランスを考え、その人のキャリアと人生を応援しながら、組織の業績も結果を出しつつ、自らも仕事と私生活を楽しむことが出来る上司のことです。本学でもこの「イクボス」を積極的に育成していこうと考え、その取り組みの一環として、VIコンサルティング取締役社長の郷田郁子さんを講師に迎え、開催したものです。

セミナーには22名が参加し、はじめに、安河内男女共同参画推進室長から開会挨拶がなされ、その後、参加者は、少子高齢化社会の中での労働者の置かれている状況について、データに基づいた説明を受けたり、実際の業務を想像しながらグルーブトークを行ったりすることによって、改めて自身と部下との働き方考える機会を得ることができました。終了後のアンケートでは9割以上の参加者から良かったとの回答があり、「部下への思いやりの大切さを痛感した」との声もありました。

今後、本学も「イクボス」養成に力を入れ、さらに働きやすい職場になることを目指したいと思います。



講師の郷田さん



セミナーの様子

平成29年度産学連携教育審議会を開催しました

平成29年12月5日(火)に戸畑キャンパスにおいて産学連携教育審議会を開催しました。

この会議は、民間企業等で採用や人材育成に携わっておられる要職の方におこしいただき、本学が進めている教育改革等に産業界からの意見を採り入れることを目的として開催しています。今年度は、大阪府立大学、千歳科学技術大学からも陪席いただきました。

今回の審議会は2部構成とし、1部では「産学クロストーク」と題して、産業界・学生・大学によるセッションを行いました。それぞれに違う学びの機会を得た学生4名の体験談を報告後、自由な意見交換が行われました。2部では、産業界と深く連携する新たな教育として、共同講座やアントレプレナーシップについて、ディスカッションが行われ忌憚のないご意見をいただき、今後の連携に繋がる有意義な議論の場となりました。



尾家学長挨拶



鶴田理事挨拶



学生発表



学生セッションの様子(MILAiS)



会議の様子(中村記念館特別会議室)

「超小型衛星技術に関する留学生受入事業」シンポジウムを開催しました



参加者集合写真

本学では、世界的に高まる超小型衛星を用いた衛星開発能力構築(Capacity Building)のための人材育成への需要に応えるために、2011年度に国連宇宙部(UNOOSA)と共同で非宇宙先進国からの留学生を博士後期課程学生として受け入れる事業を開始しており、今回、2017年度入学分をもって国費留学生優先配置プログラムの1期目が終了するのに合わせて、これまでの活動を総括するシンポジウムを開催いたしました。

同事業はDoctorate on Nanosatellite Technologies (DNST)としてスタートし、2013年度からは文部科学省の国費留学生優先配置プログラムに採択され、Post-graduate study on Nanosatellite Technologies (PNST)に名称を変更しました。またそれに合わせて、九州工業大学に宇宙工学国際コース(Space Engineering International Course: SEIC)を設置しています。

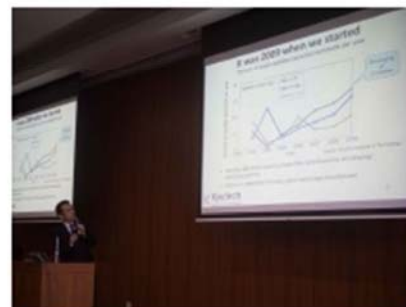
まず本学の尾家学長、文部科学省の泉氏にご挨拶を頂き、続いて、趙教授(宇宙環境技術ラボラトリー)よりPNSTについての経過報告を行いました。



尾家学長の挨拶



文部科学省 泉氏の挨拶



趙教授からの経過報告

その後、基調講演として、国連宇宙部のLuc氏、内閣府宇宙開発戦略推進事務局の行松氏、宇宙航空研究開発機構の若田氏に講演を行って頂きました。



国連宇宙部 Luc氏の講演



内閣府宇宙開発戦略推進事務局 行松氏の講演



宇宙航空研究開発機構 若田氏の講演

また、PNSTの卒業生代表としてエジプト宇宙機関のMohamed Yahia氏に修了生の報告としてメッセージをいただき、最後のパネルディスカッションでは、基調講演の3名とPNST卒業生のモンゴル国立大学 Erdenebaatar氏、コスタリカ大学 Mariela氏から学生たちに向けてのメッセージを頂きました。

本シンポジウムの参加者は総勢151名に上り、盛況のうちに終わることが出来ました。御協力頂きました関係者の方に感謝申し上げます。



エジプト宇宙機関 Mohamed Yahia氏修了生の報告



パネルディスカッションの様子

| 学内公募による人事制度改革マラソンのロゴが決定しました



本学では、事務職員が「安心と誇り」を持って働ける環境を自らの手で作り、大学のよりよい変革に繋げていくため、人事制度改革をスタートさせました。

本学を支える事務職員が一丸となり、持続的に人事制度改革に取り組むという意味で、「人事制度改革マラソン」と銘打ち、次のコンセプトに基づくロゴマークの募集と選抜投票をそれぞれ学内にて行いました。

【コンセプト】

- ・マラソン(継続性)
- ・事務職員の安心と誇り
- ・褒め合う、認め合う文化
- ・一人一人の成長

多数応募いただいた案の中から投票により、本学の人事制度改革マラソンのシンボルとなるロゴマークを決定しました。

デザインした事務職員(岩熊 克陽氏 28歳)は、

“職員が変われば、大学をより良くすることができる”という考えのもとこのロゴマークで、

“これからはじまる人事制度改革を必ず成功させる”という決意を
エネルギッシュなカラーに

“大学の発展には事務職員の自己成長が必須である”という想いを
自分の殻を突き破る瞬間をモチーフにしたデザインに
込めています。

九州工業大学・マレーシアプトラ大学国際合同シンポジウム(SAES2017)を開催しました



平成29年11月14日(火)・15日(水)、マレーシアにて、本学とマレーシアプトラ大学(以下、UPM)との国際合同シンポジウム(The 5th Symposium on Applied Engineering and Sciences : SAES2017)を開催しました。

本シンポジウムは両大学間で毎年開催されており、今回で5度目となります。今年の開催地はUPMで、九州工業大学から約80名の教職員及び学生が渡馬しました。

プレナリーセッション、基調講演、オーラル発表、ポスター発表では、日本・マレーシアのみならず、近隣のタイ、シンガポールからの研究者も参加し、参加人数は180名を超える規模となりました。

また、今回は本年度より開始した本学研究者とUPM研究者によるジョイント・リサーチプログラムのミーティングセッションを実施するとともに、本学を卒業したマレーシア人の卒業生同窓会セッションを実施することで、今後の大学間の連携をより深めるシンポジウムとなりました。



開会の挨拶(アニ副学長)



尾家学長の挨拶

cobaco tobata(コバコ トバタ)がグランドオープンしました



平成29年11月4日(土)に、築約60年の旧産婦人科医院だったレトロな建物をリノベーションし、ぬくもりのある懐かしい雰囲気の各部屋に個性豊かなショップが集まる「cobaco tobata」がグランドオープンを迎えました。

このプロジェクトは、本学工学研究院建設社会工学研究系所属の徳田光弘 准教授(北九州発の「リノベーションスクール」初代代表)と、同学科の建築計画研究室の学生たちが、企画当初から携わってきたもので、産学連携による地域再生事業の一環です。オープンに至るまで、学生たちが主体となり、テナント募集を兼ねたワークショップやイベントも開催してきました。

小さな部屋には、焙煎珈琲屋や花屋、雑貨屋、メガネ屋、陶器屋などが集まり、大学と地域との新しい関わり方として、戸畑エリアの地域課題を解決していく拠点の役割も担っていく予定です。

お近くにお越しの際は、是非お立ち寄りください。

◇cobaco tobata(北九州市戸畑区中原西2-4-22)



cobaco外観



実際に入居を考えている方への説明の様子



テナント募集を兼ねた床貼りワークショップ



ワークショップに参加した地元の子どもたち

超小型衛星試験センターがISO-17025認定を取得しました

本学の戸畑キャンパス内にある超小型衛星試験センターは、2016年7月からISO/IEC 17025:2005の認定取得に向けた活動を行っており、この度、正式に『ISO-17025認定』を取得しました。

ISO-17025とは試験所・校正機関が正確な測定/校正結果を生み出す能力があるかどうかを、権威ある第三者認定機関が認定する規格で、製品検査や分析・測定などを行う試験所及び計測機器の校正業務を行う校正機関に対する要求事項が定められています。認定を受けた機関は、製品管理・品質管理を行う上でのマネジメント力と、信頼性のある試験/校正結果を生み出す技術力が国際的に認められたこととなります。

ISO-17025認定には大きく分けて試験と校正の2種類の分野があり、超小型衛星試験センターは試験分野の「人工衛星及び人工衛星コンポーネントのISO-19683及びJAXA JERG-2-130-HB003に基づく振動試験」について認定を取得しました。

今回の認定取得により、国内外のユーザーに対する試験センターの信用が増すことが期待されます。今後は他の衛星環境試験についてもISO-17025認定の取得を目指していく予定です。



日本語版認定証

「工学女子シンポジウム」を開催しました

平成29年10月21日(土)、百周年中村記念館(戸畑キャンパス)で男女共同参画推進室主催により、「工学女子シンポジウム」を開催し、70名が参加しました。

はじめに、安河内男女共同参画推進室長からの開催挨拶がなされ、その後、本学 工学研究院 高瀬聡子助教とマイクロ化総合技術センター 新海聡子准教授の講演および本学4名的女子学生と北九州工業高等専門学校の2名的女子学生が、工学系を目指したきっかけや日頃の研究内容等の発表を行いました。

講演の合間には、講演者と参加された地域の方々との交流会も開催、本学の学生や教員と工学分野に関して、和気あいあいと意見交換が行われました。地域の方からは、「工学系の垣根が低くなり、より身近に感じられるようになりました。工学といっても、いろんな種類があって女子が活躍できることも分かり、良かったです。」等の嬉しい声がありました。また、女子学生達にとっても、人前で自身の研究や経験を発表し、工学系の研究内容や楽しさを知ってもらう良い機会となったようです。

また、このシンポジウムは、平成29年度 文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(特色型)」および国立大学協会「国立大学フェスタ2017」の関連事業です。



安河内室長の開催挨拶



高瀬助教の講演



新海准教授の講演



交流会の様子



学生発表の様子

九州工業大学教育フォーラム2017を開催しました

平成29年10月13日(金)、九州工業大学戸畑キャンパス百周年中村記念館2階多目的ホールにて、九州工業大学教育フォーラム2017「学修・教育情報を活用した人材育成教育と社会的質保証-産学の対話と共働を目指して-」を開催しました。

本フォーラムでは、教育機関と社会や産業界が連成する仕組みの具現化を目指して、社会評価に基づく人材育成教育とその質保証や、教育機関と社会・産業界との対話の仕掛け、それら実現に向けた教育機関における学修・教育情報の活用について議論しました。文部科学省の松永氏による特別講演、パナソニック株式会社の中尾氏による基調講演、続いて大阪府立大学の星野教授、千歳科学技術大学の小松川教授、パナソニック株式会社の中尾氏、株式会社日立製作所の山下氏、本学の坂本教授(大学院情報工学研究院 生命情報工学研究系)、林准教授(大学院情報工学研究院 機械情報工学研究系)によるパネルディスカッションがありました。

当日は、全国から大学関係者および企業より128名の参加があり、質疑応答も活発に行われ、大変有意義なフォーラムとなりました。



司会の坂本センター長



尾家学長による開会挨拶



文部科学省 松永氏の特別講演



パナソニック(株)中尾氏の基調講演



千歳科学技術大学 小松川教授の講演



大阪府立大学 星野教授の講演

Kyutech Identity

Kyushu Institute of Technology

01 支える要素

Symbol

02 支える要素

Base of
Authority

03 支える要素

Emotional
Benefit

04 支える要素

Functional
Benefit

06 支える要素

Ideal
Customer
Image

05 支える要素

Personality

未来を思考する
「モノづくり」と
「ひとづくり」

ユニバーシティアイデンティティ（UI）活動の一環として、
九州工業大学のタグラインを策定しました。

タグラインとは、『九州工業大学として、常に変わずステークホルダーに提供するコアとなる価値を言葉にしたもの』で、九州工業大学の社会に対する約束を言葉で表現したものです。

未来を思考する「モノづくり」と「ひとづくり」

▼モノ〈名〉 こと（一）よりは割合に具体的に感じたり考えたり出来る対象。対象一般。ものとことを包括的・抽象的に言う語

未来を思考する「モノづくり」と「ひとづくり」

▼モノ（名） こと（一）よりは割合に具体的に感じたり考えたり出来る対象。対象一般。ものごとを包括的・抽象的に言う語

最先端のテクノロジーをはじめ、技術を支える仕組みやデザイン。

これら全て、人を取り巻くあらゆる“モノ”（もの、そしてこと）は、
明治開校から100年以上に渡り九州工業大学が生み出し提供してきたものです。

多様化、複雑化し続ける世界に向かい新たな価値を生み出す“モノ”づくり、
そしてそれを担う“ひと”づくり。

「専門領域」「大学」「国」「ジェンダー」あらゆる垣根を越えて
知を接続し、組み合わせ、さらには世界を見据え、未来を考えることができる人材を
輩出し続けることを約束します。

「技術に堪能なる士君子」の養成

大学のDNAとして受け継がれる安川、山川両先生のメッセージである

建学の理念を現代の言葉として紐解き、

世の中に約束する九州工業大学のタグラインとしました。